近畿運輸局「お手伝いしましょうかにゃ？」運動開始！

（近畿運輸局）

東京パラリンピックを来年に控え、障害者スポーツ、バリアフリーに対する社会の関心が高まっています。近畿運輸局としてもこの機会を捉え、もっと「心のバリアフリー」推進するために何かできることはないか、と考え「お手伝いしましょうかにゃ？」運動をスタートしました。

「お手伝いしましょうかにゃ？」運動とは、２つの柱から成り、①従来から取り組んでいるバリアフリー教室や、バリアフリー法改正を受けた自治体への働きかけを一層強化していくこと、②職員全員で、自発的な幅広い交通バリアフリー行動を率先して行っていく運動のことを指します（率先行動）。また、運動の推進体制として「近畿運輸局交通バリアフリー大使」に近畿運輸局消費者行政・情報課の梶原係長が任命されました。（すみません、筆者です。）

①の自治体への働きかけについては、当局で行っているバリアフリー教室を広めていくため、自治体に取組を紹介、バリアフリー教室開催のマニュアルを作成するなど、自治体独自で取り組んでいただけるよう後押ししています。実際に独自のイベントを開催する自治体などもあり、少しずつ効果が出てきています。

②の職員による率先行動とは交通バリアフリー行動（駅やバス停などで高齢者・障害者等で困っている様子の人がいたら、「お手伝いしましょうか？」と声をかけ、サポートすること等）を、日々の通勤等で積極的に行おうというものです。誰かが声を掛けているのを見ることで、結果的に声かけをしやすい雰囲気が作れるのではないか、と考えています。また、一般社団法人運輸振興協会の協力を得て、のりたろうがデザインされた交通バリアフリーストラップを作成。日頃から身につけることで、率先して交通バリアフリー行動を行っていく意識づけを図ります。ストラップの着用は任意ですが、多くの職員が通勤の鞄や職員証にストップを着けてくれています。また、このストラップは、バリアフリー教室の参加者や、イベント参加者にお配りし、啓発に役立てています。

　１０月８日には運動の開始式を実施し、全盲の落語家“桂福点”さんを講師に迎え、職員研修も行いました。福点さんの軽快なトークで視覚障害者の困りごと等について学んだあとは、実際にアイマスク、白杖を使い疑似体験、手引きの方法のレクチャーを受けました。ポイントは、動きについて一つ一つ声で説明する。視覚障害者の方の半歩斜め前を歩き、階段などでは真横に立って、一歩ずつ先に登ったり降ったりする。また、誘導の際は肘や肩等どこを持ってもらうのが良いか、歩くペースはこれで良いかなど、分からないことは遠慮せず本人に聞くなど、やはりコミュニケーションが大切だということを再認識しました。また、声のかけ方から、電車でひとつ空いている席に案内する方法（膝が当たるまで前に進んでもらう）まで、基本的なことから上級編までみっちり教えていただきました。研修員からも「大変ためになった。」「なるほどと思うことがたくさんあった。」という感想がありました。後日バリフリエピソードを募集したところ、「出張先のバス停で白杖を持った方に声をかけてみた。その方は『大丈夫ですよ。ありがとう。』と笑顔で応えてくださったので、これからも声をかけようと思った。」「車いすの方に『押しましょうか』と声をかけると喜ばれた。誰かが動くと周りの人も協力しやすくなると思った。」など、前向きな投稿が寄せられました。

　皆さまも、困っている方を見かけたら気負わず「お手伝いしましょうか？」の声かけをお願いいたします。初めての声かけは勇気が要りますが、一度言ってしまえばそれほどたいしたことでもないと気づくと思います。そして断られても気にしないでください。また、サポートする際は、必ずご本人の意思を確認してください。そのほか、高齢者・障害者等に積極的に席を譲る、多目的トイレやエレベーターはなるべく使わない、点字ブロックの上は空けておくなどの些細なことも立派なバリアフリー行動です。ご協力をよろしくお願いします。